

## 一筋の道

この日

平素は宗教などが要るものかと大言壮語して、得々として三毒煩惱のままに五欲中心に生きています。金はある、地位はある。不幸などと言ったものは我が家にはない。然るに、愛子が病気になる、医師も重態を告げる、我が子可愛いやの親の情は、如何にかして病気を治してやりたい。ついに「信ずれば如何なる病でも治る」という迷信に走るのです。迷信は唯に医者にかかれられない貧民が入るのみではない。如何とも出来そうにない不幸は、如何なる人をも見舞います。今や一世を挙げて迷信邪教に奔迷していますが、それは社会のあらゆる階級の人に行き渡っています。人の世の全ての不幸を廃して幸福のみを得ようとする、この点に向って敏感なる現代人は、不幸の全てを迷信に持ち込んで解決しようとしているのであります。

そうした人間の求めるものは正しい生活でも真実の道でもなく、ただ不幸の除却であり、幸福の獲得でありますから、手段を選ばず、邪正、迷悟を選ばぬのであります。ここに我が子が世の不幸に泣いている。その親は、その子が「人の道」で助けられようが、キリスト教によるうが、あるいは仏教によるうが、手っ取り早く効果さえ挙げたらいいのです。そうした功利的な根性が、その親を無宗教にし、その子を迷信に走らすので、無宗教と迷信とはものの一体両面であります。眼はその結果の上にそそがれているのであって、人格的要求の上に立っているではありません。

大無量寿経、十八願の宗教に於いてはそうした功利的打算的な不純分の微塵の混入を許されません。宗教はそれ自体、正善であり、大道であります。それ故に信樂するのであります。三世を貫く大道なるが故に正信さるべきであります。たとえ、その為に、不幸が来ようとも、苦悩が待とうとも、行くべき、歩むべき道なるが故に歩むのであります。聖人のいわゆる「地獄におちたりともさらに後悔すべからざる」大道であります。唯一必然の念仏道であります。それであるが故に真の安住が現前するのであります。

信ずる以前に

宗教は人間によつて造られるものではない。真実宗教は、人間の信ずる以前、人間生活以前に実在する唯一の真実であります。これを信ずるの信じないのと言わるべきものではなくして、これを於いて外に真実はない。これのみ真実であつて、他は悉く迷妄であります。その迷妄を否定して、生命あらしめ、真実たらしめるもの即ち宗教であります。

人の至れる僞慢は自ら活きているとの偏見であります。自ら活きているものは宗教のみであり、他は一切生かされているのであります。この生かされてあることへの開眼こそ即ち信心であります。無量寿とは如来の体であると共にみ名であります。無量寿の生命は不断に廻向せられています。無量寿の廻向こそ如来の生命であります。この無量寿こそ、大善であり、大功德であり、無限の法蔵そのものであります。名号の廻向とは実に一切の廻向であります。されば聖人は「不廻向」の宗教、即ち凡

聖一切の自力迷妄の廻向を廃捨して、如来の廻向顕現のみの真実を開顕せられまし  
た。

然るに、迷信者流は、この廻向の本義を知らぬが故に、己が邪妄を偶像に廻向して、  
その功利的欲念を満足せんとするのである。かかる邪妄の上に立てる善悪は、畢竟、  
善というも邪悪にすぎないのであります。枝末の苦惱より、その流転の根源へと覚め  
てゆくことを忘れていきます。

我等は、この唯一真実なる生ける如来への開眼、即ち信心の世界において、道の心  
源を覚知するのであります。是れ浄土真宗において、仏智疑惑を以つて、生死流転の  
本罪とする所以であります。宗教えの迷惑、迷妄は、人生及び我への全体の迷妄であ  
り、悪であります。

### 感情

感情は人間生活のうるおいであります。苦しまず、悲しまず、泣かず、笑わざるを  
以つて、道に徹する者とするが如きは、枯木寒巖を以つて士君子とするが如くであり  
ます。感情は、花における色彩の如く、火における熱の如く、実に人の世を莊嚴する  
ものではありません。しかしながら感情にして正しく養わざれば、かえつて人の世を暗  
たらしめる根源となります。

宗教を以つて一片の感情とするが如きは誤まれるもまた甚しいことでもあります。  
感情の動揺定まりなき芸術青年は、時に涙して感激し、あたかも十八願の世界の円融  
無碍に参徹したようであります。その涙も、もちろん、その場合御本人にとつて偽り  
ではなかつたはずです。しかし熱しやすくさめやすくして、一度醜悪なる感情に見舞  
われるや、一切の宝玉も聖教も、それを一拳にして泥土に投入します。彼はそうした  
時も亦、自己の真实性を自信しています。かくして救われざる自己を転々として移し  
つつ、その間に甘き感情を求めて流転します。彼の求むるものは真理でなく、真実宗  
教でなくして、甘き感情の陶醉であり、幸福であります。であるから彼の歩みの足跡  
を検討すれば、唯その好感のよせられる、都会よきものからものへの、しどろもどろ  
の千鳥足であります。そこに一貫の行歩を見ることは出来ません。彼は時に師の一  
喝よりは、路仏一婦女の甘言を高く受け取ります。しかして、かかる感情の子は、必  
ずその体底、何ものにも頭を下げざる高慢、誹謗正法の毒刃を研いでおります。

しかし、これが果して人ごとでありましょうか。聖典の尊き言々句々よりは、浮薄  
なること竹紙の如き賞讃を天の好音の爆発するが如く思う心が、果してないでありま  
しょうか。「我になし」とする所、すでに悪魔はそつと宗教なき迷妄の黒闇の中にひき  
入れております。

三世徹貫の生命道は、人間の感情に答えず、左右されず、それ自体現行します。現  
行して無限に浄化し、聖化して、やむ時がありません。聖化し浄化するが故に救済で  
ありますが、かかる如来への開眼なき限り、貪欲等によつてのみ流転するが故に、宗  
教は必ず自覚であります。感情は救済のみに涙せんとして、智慧光への冷たき開眼を  
拒みます。信心の智慧の成就されぬ限り、理智的な人といえども流転します。

一切衆生は三世徹貫の生命道に乗托すべきであります。

## 一筋の道

「△△は天才である。」

「天才ではない。唯よく精進を続けたただけである。」

「そのよく精進を続けた所が天才である。」

こうした問答がある所でなされました。確かに一筋の道を継続して精進すれば一人の天才を造ります。如何に生来の大天才も、それが、気まぐれにパツと光るだけで、あとが続かなければ、花火線香にすぎません。

一筋の道を歩めば、必ず大成します。

一筋の道を歩めば、必ず輝きます。

一筋の道を歩めば、必ず歓喜が生れます。

一筋の道を歩めば、必ず力が生れます。

一筋の道を歩めば、必ず尊敬が生れます。

一筋の道を歩めば、我が真実の相が知られます。

一筋の道を歩めば、人生の真相がわかつて来ます。

一筋の道を歩めば、必ず人格の上に誰も犯すべからざる筋鉄が通つて来ます。

親鸞聖人が聖人たる所以は、念仏道を一貫して行歩なさつたからであります。しかも、その一貫相続の行歩が宗教においてなされたからであります。根本真実の上になされたからであります。

多くの場合、人と道とが対立しています。その対立や隔りをはからいによつて取ろうとします。しかし聖人にあつては道と聖人と一体でありました。仏凡一体をそのまま自証し行歩し一貫されたのであります。多くの同行は、仏と自分を別々にしておいて、その間を「そのまま助けてもらう」のだと、一生涯復習してもらいつつ、終に獲ることなくして世をおわるのであります。

順逆二境に随つて山と谷、波乱万丈とおどる煩惱の波に翻弄せられながら、仏を都会よく話すことが宗教ではなくして、波乱万丈の雲霧の中を一貫したもう如来の本願力に乗托して、移り変る煩惱を煩惱と内省自證して、仏願力の金剛不壊に安住することこそ、真実宗教であります。煩惱は千変万化の雲の如く、一貫するものではありません。仏のみよく不動常住に一貫し給うのであります。

「汝一心正念にして直ちに來れ、我能く汝を護る。」

如来は彼岸に召喚する。「直ちに來れ」と召喚されてあります。迂とて遠まわりしたり、廻とて進まないで一つ処を廻つていたりしないで、「直ちに來れ」と召喚されるのであります。

世には釈尊や聖人を語る時には涙してその一貫行歩を讃えておきつつ、自分のことになると右や左を顧みて、無責任な世間の毀譽褒貶に一一会釈しつつ、止まったり、迂回したりしている人があります。如来のみ心にも忠実であり、煩惱の雑音にも親切であることが出来ましようか。こうした人は、到底「我能く汝を護る」の撰取不捨の力強さを身を以つて知ることが出来ないであろう。それは強敵に会えばがたがた震えてしまう武士と同一で、彼の内にはまだ永劫を貫く願作仏心、衷心の本願が明願で

なく、自力がとれないのであります。如来の真実よりもまだ世間の名利の方が大切なのであります。こうした人は一生涯何もかもめでたしめでたしに治めようとして終ります。

けれども又、それとは逆に、剛直なる我慢を出して、世間の反対に出会い、疑謗がおこればさながら自らの真実性の証明であるかの如く考え、誰の忠告も耳に入らず、乱を恐れざるに似て乱を好み、金剛不壊に似て剛直人を制せんとするは、又まことに悲しむべきであります。一筋の道を歩むに似て、我慢をおし通しているのであります。

肅々として一道を精進しなくてはならない。しかも内に我慢を光によつて照破されて、世の疑謗にも耳をかたむけて、人をさげすみ、人を求めず、順境にも逆境にも唯一筋の道を歩むべきであります。

世の治乱興亡を超えて、如来のみ、宗教のみ、不滅に輝いています。一切衆生が悉く反逆しようと、真実は依然として真実であります。

一筋の道とはその宗教に生かされることでもあります。

一筋の道あり

この道 現実より浄土に通ず

一切群生無限の苦悩の底に

静かに必然に流るる至純の業力

処を超え

時を超え

人を超えて

永遠に輝く たつた一つの本尊

滅ぶべき一切の群生を乗せて

永遠の浄土にはこぶたつた一つの力

この力 全人格の上に動けばこれを「信」という

如来は信なり、我も信なり

彼我一体の信、ここに永遠の生命動く

（光明第十巻八号巻頭言）